
秘蜜事～いっそ逢わなければよかった…～

架羅馭璃 千佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密事〜いつそ逢わなければよかった〜

【Nコード】

N9447Z

【作者名】

架羅駆璃 千佳

【あらすじ】

アンジェリカ
Angelikaはアルカバ帝国の正真正銘のお姫様。Pier
ルは下町で彼の名を知らない人はまずいない程の腕を持ったファッションデザイナーで仕立て屋。お姫様と仕立て屋の間には誰にも言えない秘密がある。

#1 プロローグ

浜辺を歩きながら歌っている女性がいた。

女性と言っても17、8くらいだ。

《王族の私には外がどんなものか知らない

どんな人がいて

どんな会話をしているのかも

何も知らない

ただ私が知りうるものは

王族という生き物が醜^{みにく}い生き物ということだけ

私は王族が嫌い

何故私が王族なのだろうか

王族の私には外にどんな世界が広がっているのか知らない

どんな文化があり

どんな政事^{まつりごと}があるのかも

何も知らない

ただ私が知りうるものは

王族は外と関わりをもとしない生き物ということだけ

私は王族が嫌い

何故私が王族なのだろうか

私は王族ではなく
平民に生まれたかった…

その願いは

はかなくも崩れ去った

今更せがんだところで

過去は変えられない

私が王族として生まれた瞬間
この願いは届かない

私は王族が嫌い

何故私が王族なのだろうか

その答えは

誰にも解りはしない》

とても透き通っている歌声。

誰もが聴き入る歌声。

#2 隠し通路 - 1

アルカバ帝国の中心部スヴィル帝都にそびえ立つのは我が国の帝王が住まわれている城がある。

高台にあるそれは、灰色の塀に囲まれ銀の門には槍を持った門番が2人。

城内に入るためにはその門を潜らなければならない。

しかし、たったひとりだけ門を潜らずに城内へ入れる者がいた。

「よつと」

城から何mと離れている裏路地にある小さなマンホール。

そこに勢いよく飛び込む1人の17、8くらいの女性がいた。

肋骨部分まで伸ばした蒼色の髪を金色の髪ゴムで結んである。

マンホールの蓋は小さいがその下の水路は大人ひとり通れるくらい
の大きさに掘られてある。

その中を女性は進んでいく。

何mが行った先には4つに枝分かれしている。

女性は躊躇^{ためら}いなく左から2番目の道に進んで行く。

ひたすらに進んで行くと行き止まりとなり、上へ上がるしか道がな
くなった。

女性は上へ上がるための階段を上っていく。

どうやらこの薄汚れた水路から地上へ出るらしい。

上に覆い被っていたマンホールの蓋をゆっくりと開けた。

#3 隠し通路 - 2

マンホールの蓋を開け、ヒっそりと顔を出し、ぐるりと一周辺りを見回したあと、地面に両手を付き腕の力で体を引っ張り上げた。

そこは、灰色の塀に囲まれた城の裏庭だった。

どうやら、あの裏路地のマンホールから城の裏庭のマンホールがつながっていたようだ。

城の裏庭には庭師のおじいさんが庭の手入れをしに来るくらいで、普段は誰も寄り付かない場所だ。

両足をしっかりと地面に付けた女性は一度背伸びをしたあと、マンホールの蓋をきちんと元の場所に戻し、どこかへ走って行った。

女性が向かった先は鍵の掛かっていないどこかの窓だった。

窓に手をかけ、引いて開けた。

女性は軽々と窓を超え、部屋へ入った。

その時、ドアをノックする音がした。

コンコン

「アンジェリカAngelika様。そろそろお時間です」

ドアの方から20代前半の女の人の声が聞こえてきた。

どうやらアンジェリカAngelikaと呼ばれた女性に仕えているメイドらしい。

Angelikaは息を整え、
「今行く」とドアの向うにいるメ
イドにむかって返事をした。

#4 銃・剣・弓・1

アンジェリカ

Angelikaは8発用拳銃を右手に弾の箱を左手に持ち銃発練習場に来ていた。

銃発練習場と言っても特殊な機械や物はなく、あるのはただ等身大の人形がいくつも壁に立て掛けてあり、中央より少しドア寄りに置かれてある長机が横一列に壁から壁へ置いてあるだけの部屋。

そしてその部屋は他の別室より少し大きめに作られている。

「さーて。始めましょうか」

Angelikaは手に持っていた拳銃と弾の入った箱を長机に置き、どこから持ってきたのか、コードのないヘッドホンで耳を塞いだ。

そして、拳銃に弾を8つ詰め、構えた。

前に立て掛けてある人形目掛けて引き金を引いた。

バンッ！！

火薬の破裂音とともに弾丸が飛び出し、見事人形の額ど真ん中を貫いた。

あとの7発も見事に急所を打ち抜いた。

「ふー……」

8発すべて使い空となった拳銃を長机の上に置いた。

#5 銃・剣・弓―2

「^{メアリー}Maily、アルベスを持ってきて」

Angelikaは耳を塞いでいたヘッドホンを外しながらドアの傍に立っているAngelikaに仕えているメイドに頼んだ。

「かしこまりました。すぐにお持ち致します」

そういつと、メイドのMailyは部屋をあとにした。

＊＊

この部屋には椅子がないため、Angelikaは長机に腰を降ろした。

（^{ベント}Bentが見たらきつと怒るんだろうなあ）（

B e n tはA n g e l i k aの教育係の男性だ。

と、そこへドアをノックする音が飛び込んできた。

コンコン

「失礼します」

縦30cm横15cmの長方形の箱を両手に抱えているM a l yが帰ってきた。

A n g e l i k aは机から降り、M a l yから箱を受け取った。

それを机に置き蓋を開けた。

箱の中には長さ20cmほどの銃が入っていた。

銃の柄の部分にALVESと彫られてある。

アルベスはAngelikaの愛用片手銃。

#6 銃・剣・弓―3

A n g e l i k a は箱からアルベスを取り出し、構えた。

そして、新しい人形を置いてとM a l y に頼んだ。

置いてもらった人形目掛けて撃ち込んだ。

静かに人形の急所を貫いた。

火薬の破裂音がしないのは、アルベスにはサイレント機能が備わっているためだ。

「やっぱ、私にはアルベスが合ってるわ。破裂音はないし反動も少ないし、それに、軽いし」

A n g e l i k a はアルベスを軽々と振り回してみた。

「拳銃は小さくて手軽だけど、音は大きいし反動も大きい」

Angelikaはアルベスを箱にしまった。

「これ、しまつていて」

箱の上に拳銃と弾の箱を置いてMayに渡した。

「さーてっ。お次は剣かなー」

Angelikaは部屋を出た。

#7 銃・剣・弓―4

Angelikaは部屋を出たあと、自分の部屋へ歩を進めていた。

先程窓から入った部屋だ。

どうやら、この部屋はAngelikaの私室のようだ。

部屋には大きな窓が1つある。

今朝Angelikaが入ってきた窓。

派手な紫色のダブルベッド。

その横には真っ白な3列2段の引き出し。

引き出しの上にはたくさんのジュエリーが綺麗に飾られてある。

部屋の中央には可愛らしい花柄の丸いカーペットの上にガラス張りのテーブル。

テーブルの上にはなにやら資料のような白い紙が何枚も重なり合って置かれている。

それから、ドレッサーやクローゼットも置かれていた。

Angelikaは部屋に入ると、クローゼットを開け、黒いブラウスと黒いショートパンツを取り出し、ベッドの上に放り投げ、着ていた翠色のインナーと茶色のボトムを脱ぎ、クローゼットから取り出したブラウスとショートパンツに着替えた。

履いていた踵かかとの高いピンヒールを脱ぎクローゼットの中に置いてあるいくつかの靴の中から踵が低いパンプスに履き変えると、とても動きやすい格好となり、脱いだ服を持ち部屋を出た。

脱いだ服は洗濯室へ持って行った。

＊＊

A n g e l i k a が中庭に来た時にはもうすでに剣術の師匠せんせいが来ていた。

「お待たせしてすみません」

A n g e l i k a は師匠に近づき、詫びた。

「いえいえ。A n g e l i k a 様。私のような者に詫びないでください」

「しかし……！！私の師匠なのですから。さあ、始めましょう」

A n g e l i k a は手渡された片手剣を構えた。

8 銃・剣・弓―5

カーンっ！

金属と金属が触れ合った甲高い音が中庭に響いた。

「Angelika様、少しお強くなりました？」

「そんなことないわ。逆に師匠せんせいが衰えたんじゃない？」

「私はまだ43ですよ。衰えるには少し早いのではないでしょう
か？」

「そうかしら。43でももう歳なんじゃない？」

「40代を甘く見たら痛い目に遭いますぞっ！」

師匠の剣がAngelikaの剣を弾き飛ばした。

「…っ」

数m飛んだ剣はガンッと鋭い音を発てて地面に突き刺さった。

「師匠はほんとお強い」

「はっはっはっは。これで失礼します。Angelika様、鍛練を怠りませんよう」

師匠は剣を鞘に戻した。

「ありがとうございます」

＊＊

「Maly。午後からの予定は？」

Angelikaは自分の部屋に帰ってくるとすぐさまベッドに突っ伏しながら聞いた。

「何もあります。次の弓矢で終わりでございます」

「はー。…弓矢って神経削るからやなんだよねー」

「そんなことおっしゃらずに。弓矢が終わるしだい、昼食なので
から。頑張ってください」

「うー。お腹すいたー」

「あ、そーだっ」

突っ伏していた顔を持ち上げた。

「私は腹痛で今日は休みます」

仮病を使うつもりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9447z/>

秘蜜事～いっそ逢わなければよかった...～

2011年12月31日08時50分発行